

氏 名	歐 李 季 坤
	おう り き こん
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 300 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 6 月 21 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	Verbreitung der lymphatischen Gewebe auf das Tränenorgan des Macacus cyclopis (台湾猿涙器に於けるリンパ組織の分布)
論文調査委員	(主 査) 教 授 堀井五十雄 教 授 西村秀雄 教 授 岡本道雄

論 文 内 容 の 要 旨

涙器において、リンパ組織の比較解剖学的知見を確立するため、著者は成熟台湾猿 3 例を対象となし、涙腺および結膜嚢を含めた涙排泄道全体の横断連続切片標本を作成、これを通じて、上下リンパ装置の構造と分布を組織測定的に追及精査し、次の結果を得た。

1) 台湾猿の涙器系は、一般に、リンパ装置にとみ、これらは、3 種の形態、すなわち、リンパ浸潤、孤立小節およびパイエル型集合小節の形をとって分布する。

2) 本例涙腺では、リンパ組織がリンパ浸潤の形で、小葉間基質に集中的に現われ、ここから小葉内部に向かって漸減分散する。この現象は人涙腺で、胎生期にみる、リンパ装置の發育状態と完全に一致する（東）。

3) 結膜嚢は、鳥類以上の脊椎諸動物を通じ、2 部、すなわち、瞼板結膜と可動性結膜に分たれる。台湾猿の結膜嚢では、可動性結膜域だけに、リンパ組織の形成分布をみとめ、瞼板部はこれを欠く、これと同様の所見が、鳥類（三和）、哺乳動物（小松原）の結膜嚢についても、文献的に指摘され、人類に及んで始めて、リンパ組織は、瞼板部を含めた、結膜嚢全域に亘って分布発達する（大串）。更に、本例の瞼結膜を注意すると、パイエル集合小節は、上瞼域に局限して良好な發育を示すが、リンパ浸潤や孤立小節のような、未分化リンパ装置の方は、眼瞼全体に亘って、普遍的に、拡散分布する。この像は人類のそれと、基本的に一致する。鳥類および哺乳動物の瞼結膜に於ける、リンパ装置の發育容姿は特異で、パイエル集合小節は、下瞼域のみに、局限的な発達を示めし、上瞼域には、未分化リンパ装置の集中的な分布をみとめうる。

なお台湾猿の球結膜および瞬膜では、未分化リンパ装置の普遍性分布をみるが、この所見も人類に於ける、それとはほぼその軌を一にする。鳥類および哺乳動物では、球結膜と瞬膜を通じ未分化リンパ組織が、その鼻側部に謂集好発する。

4) 台湾猿で、涙小管、涙嚢、鼻涙管のような、固有涙排泄道を通覧すると、未分化リンパ装置は、鼻

涙管の首側部に当って、パイエル集合小節の形成とともに、最高の發育度を示めし、該部から上方或は下方に向って漸減的に分散分布する。かかる現像は、文献に照らせば、人類胎生末期に於ける、固有涙排泄道での、リンパ装置の發育段階に相当する（東）。

論文審査の結果の要旨

著者は台湾猿における混器上皮下リンパ組織の構造と分布を追及し、主として伊藤研究室における他動物の研究成果と比較し、涙器におけるリンパ組織の比較解剖学的知見を完成したものである。その所見の主なものを摘録すれば次のごとくである。

1) 涙腺ではリンパ組織はリンパ浸潤の形で小葉間々質に集中する。この現象はヒト胎生期涙腺にみられる發育段階に一致する。

2) 結膜囊におけるリンパ組織は可動性結膜域だけにその分布は限局されており、これは鳥類および他の哺乳動物の所見と一致し、ヒトのばあいと異なる。ところが眼瞼結膜におけるリンパ組織は上眼瞼に限局して集合リンパ小節が出現し、孤立リンパ小節やリンパ浸潤のような未分化リンパ組織は眼瞼全体にわたって分布する。この所見はヒトにおけるそれと原則的に一致し、鳥類や他の哺乳動物における態度とは異なる。眼球結膜および瞬膜では未分化リンパ組織の普遍性分布をみとめ、ヒトにおける所見と一致し、他動物とは異なる。

4) 涙小管、涙囊、鼻涙管におけるリンパ組織の分布は鼻涙管の首側部に当って集合リンパ小節の形成とともに最高の發育を示し、そこから上方および下方に向ってそれぞれ漸減的に分散分布する。この現象はヒト胎生末期の態度に一致する。

要するに台湾猿涙器におけるリンパ組織の分布、発達を総合的にみると、ヒトと他動物の中間にあって、どちらかと言えばヒト胎生期の態度に一致する。

この研究は比較解剖学上重要な基礎事実を明らかにしたものである。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。